

応用生態工学研究会ニュースレター No. 8

Ecology and Civil Engineering Society (E C E S)

1999年8月10日(火)発行

〔発行所〕 応用生態工学研究会事務局：〒102-0083 東京都千代田区麹町4-5 第七麹町ビル 226号室

TEL.03-5216-8401 FAX.03-5216-8520 E-mail: see@blue.ocn.ne.jp

〔発行者〕 応用生態工学研究会 (編集責任者: 幹事長 谷田一三, 事務局長 熊野可文)

第8号 目次

はじめに

1. 札幌基礎講座「多様性と保全の生態学」
開催報告
2. 第3回総会・研究発表会
3. 福岡基礎講座開催案内
4. いろいろなニュース
新著紹介
5. 事務局報告

はじめに

札幌基礎講座「多様性と保全の生態学」も無事終了しました。第3回研究発表会への一般講演の申込みも集まり、会員の皆様には、この第3回総会及び研究発表会への参加をお願いします。

1. 第3回総会 : 9月18日(土) 13:30~
2. 第3回研究発表会: 9月18日(土) 15:00~
(夕方、懇親会)
3. 第3回研究発表会: 9月19日(日)
9:00~16:30

会場: 科学技術館サイエンスホール

4. 霞ヶ浦現地見学 : 9月20日(月)
8:00~15:00頃

以上の参加申し込みは、1999年8月31日までに事務局へ



・ 7月17~18日、札幌基礎講座は
北大学術交流会館で行われた。

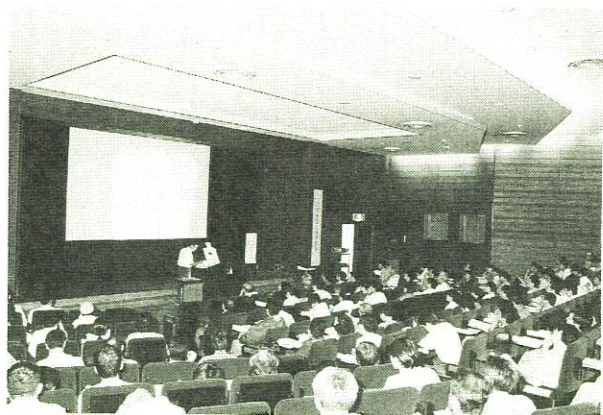
1. 札幌基礎講座『多様性と保全の生態学』
開催報告

鷺谷いづみ幹事が講座主任を担当し、橘川次郎副会長、谷田一三幹事長、中村太士幹事の4名による8時限の基礎講座「多様性と保全の生態学」が7月17日~18日の2日間、札幌の北海道大学学術交流会館で開催されました。翌19日は札幌市の基盤を造った豊平(とよひら)川を上流から下流まで見学しました。

北海道は自然が多いとよく言われ、当たり前のように納得する子どもが多いようです。しかし、実態はどうでしょう。北海道の固有性と関係の無い自然も含めてひと括りでとらえ、自然が多いと満足している気がします。広大な面積を有する北海道は持続可能な開発がまだ続く土地柄です。これからも当然、自然環境の改変が続くでしょう。このような状況にある北海道で「多様性と保全の生態学」について基礎講座を開催したところ、多くの技術者が受講しました。

受講者は17日220名、18日は198名、現地見学は講師も含め45名でした。

受講者の内訳は、道内85%、道外15%。男性80%、女性20%。工学系60%、生態系40%。社会人80%、学生20%でした。特筆すべきは、女性と学生が各々全体の20%を占めていたことです。会場の雰囲気は和らぎ、講座内容の固さを程よくみほぐしてくれた気がしました。



・ 札幌基礎講座 谷田講師の講義風景

受講者には前回の大阪でのワークショップ同様、修了証が4人の講師から一人一人に手渡されました。修了証は申込みの代理でもかまわないが、2日間連続して受講した人のみ、という条件を付けました。このため受付した全受講者の約8割、170人が修了証を手に入れました。

今回の実行委員は、大学4名(内学生3)、行政1名、建設コンサルタント等7社18名の計23名です。受付など担当部署をきめ、Eメールでやり取りをただけの当日ぶっつけ本番で実行したのですが、たんと進行しました。本業で忙しい委員は、会合なしでもこのような講座が実施できたという事例が獲得できました。担当の責任感とチームワークを今後大事にしたいと思います。各講義の概要と現地見学の様子はつぎの通りです。

1日目の7月17日(土)は13:00～18:30まで4講義行われた。

《1時限》 13:00～14:15 鷺谷講師

「生物多様性と健全な生態系の持続：目標と現状」



・鷺谷講師の講義風景

鷺谷先生の著書「生物保全の生態学」を教科書として、各テーマについて具体例を用いわかり易く進められた。

「生物多様性の保全」と「健全な生態系の持続」は、後の世代が現世代と同じように自然の恵みを受しながら人間らしい生活を営む権利を保障するための社会的な目標である。

生態系や多様性の維持機構等に関する我々の理解が十分でないため、その変化や人為的干渉の影響を十分に予測することは難しいのが現状である。そのため悪い影響を及ぼす恐れのあることは出来るだけ避けるという「予防原理」に基づく判断が大切である。

《2時限》 14:25～15:40 鷺谷講師

「生物多様性の危機の現状と要因」

生物多様性の危機の現状把握には、「種の絶滅」に着目するとわかりやすい。現在の絶滅は、その速

度と規模、新たな種分化を伴わない絶滅という点からも、過去の自然の絶滅とはまったく異なる現象である。

生物多様性の危機をもたらす主要な要因としては、生息・生育環境の喪失とその分断・孤立化、侵入生物の影響があげられる。

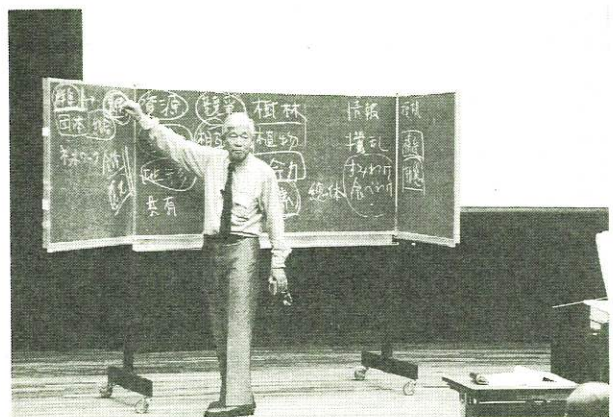
《3時限》 15:50～17:05 谷田講師

「河川生態系における食物連鎖とその多様性」

河川生態系における底生動物群集にとって、落ち葉などの外来性有機物は餌資源として非常に重要である。しかし、これらの底生動物は食性の幅が広く「でたらめに」食べている傾向が強い上、発育段階や季節によっても異なる。そのため、河川においては食物連鎖のつながりを表わす指数:コネクタンス(種間結合度)が高く、その複雑な構造はまさに「食物網」となっている。

《4時限》 17:15～18:30 橘川講師

「多様性の生態学1：生物群集を理解する」



・橘川講師の講義風景

生物の群集、集団とは、単純な要素の集まりではない。群集を構成する要素とその相互関係、群集の集合体である生態系、景観(景相)など、すべての段階を考慮しなければ、多様性はわからない。

ニッチやすみわけなどの基礎概念をはじめ、さらに動態や、多様性と群集構造などに注目することで、環境との対応など生物群集を理解する評価軸が見えてくる。

(おまけ)「オーストラリアの鳥類生態ビデオ上映」

最近撮影された珍しい鳥類生態のビデオを、1日目の講義終了後、上映した。

2日目の7月18日(日)は9:00～16:30まで4講義行われた。

《5時限》 9:00～10:30 橘川講師

「多様性の生態学2：動物の多様性を支配する要因を探る」

生物群集を現象的に把握するだけではなく、その多様性について支配要因を理解することは、応用生

生態工学的なアプローチにおいて重要な課題である。ここでは、乾湿や地形などのさまざまな環境条件を題材として示しながら、動物の多様性に関する支配要因となる9の視点(進化の歴史/面積(規模)/環境傾斜/植物の種類/群落の構造/群集の組成/ギルドの大きさ/ニッチの幅と重複/多様性の動態)を解説する。

《6時限》 10:45~12:15 鷲谷講師

「絶滅過程を科学する-個体群の衰退と絶滅」

かつては大きな個体群を成していたものが、何らかの原因で急に衰退して小さな個体群となった場合は、絶滅する危険性が大きいので注意が必要である。

小さな個体群で絶滅のリスクが高まるのは、生存率や繁殖率が低下(決定的要因)し、偶然性が個体群の動態を強く支配するようになる(確率論的要因)ことによる。

種の保全においては、環境変動性を把握すること、4桁以上の個体数を確保すること、情報が少ない場合には、4桁以上の個体群を2桁以上確保することが必要である。

《7時限》 13:15~14:45 鷲谷講師

「生物多様性保全のための管理と計画」

生物多様性保全のためには、持続性を目的にした「生態系管理」の概念が重要である。その実行においては、大きな不確実性を伴うため、事業のモニタリングによる検証、多様な利害関係者の意志を反映させた「事業の改善」を行うといった順応的管理が必要である。「為すことによって学ぶ」ための順応的管理プログラムにおいては、管理者、市民、研究者の前向きな係わり合いが成功の鍵を握る。

《8時限》 15:00~16:30 中村講師

「水辺林の更新動態と生態学的機能」



・中村講師の講義風景 (7/18)

流域の生態系を考える場合、重要な構成要素として、河川の物理環境がある。流域の上流から下流に向かって、山地溪流・扇状地河川・自然堤防帯河川にわけると、河川の形態および構成要素は顕著に変化

する。流域における森林と河川の相互作用を考えると、水辺域(河食によって形成された区域)を「構造」と「機能」に区分する必要がある。河川の構造は基盤条件を形成する河床地形と斜面地形および水辺林から成る。水辺域の機能は、日射遮断、流下物の捕捉、保持などがある。

河川形態の変化がもたらす水辺林の種分布、河川の様々な物理的構造、さらにこれらを巧みに利用する水生生物の摂食機能変化など、河川沿いの生物群集は河川が持つダイナミクスと、それによる地形を利用しながら存在してきた。

重要なことは流域システム全体を維持するために、水辺域の構造と機能を正確に理解し、動的に管理する手法を採用することである。

3日目の7月19日(月)は8:00~13:00に現地見学を行った。



・定山溪ダムの現地見学 (7/19)

■現地見学

現地見学は、一般参加者30名、講師3名、説明者6名そしてスタッフ6名の総数45名で実施した。札幌は豊平川の扇状地上にできた都市だが、扇状地の上流、下流にも都市が拡大して自然環境が変化している。変化しつつも都市の中に残された豊平川周辺の身近な自然の状況、すなわち豊平川の現況を上流から下流まで見学した。

まず札幌の中心市街より30km上流の定山溪(じょうざんけい)ダムで湖水面周辺の環境と生態学的混播法(タネや小苗による自然林再生方法)を見学した。つぎは近くにある樹木のタネ56種から11880ポットの小苗をつくっている岡村宅(生態学的混播法の考案者)に移動した。移動中のバスでは、「なぜダムのあそこに小苗を植えないければならぬのか、自然の遷移にまかすべきではないか」との疑問が出され、意見交換もされた。つぎは藻岩山の頂上から豊平川の全景を把握した。頂上から下って中流の扇状地にかかる幌平(ほろひら)橋、下流の沖積地にかかる雁来(かりき)大橋からそれぞれ豊平川の景観をみて

8:00～13:00の半日現地見学を終了した。

〔札幌実行委員 岩瀬晴夫〕



・札幌基礎講座終了後全員で記念写真 (7/18)

2. 第3回総会・研究発表会

来る9月18日(土)～20日(月)に開催予定の第3回総会及び研究発表会、霞ヶ浦現地見学の準備が着々と進められています。

研究発表会への一般講演には、以下24本の講演申込が事務局まで届きました。今後、これを分類して、各々に幹事を中心とした司会者を立て、プログラムを組みたいと考えております。

会員の皆様には、8月31日までに参加申し込みを事務局までお寄せ頂くようお願い申し上げます。

(1) スケジュール

9月16日(木) 16:00～19:00

第4回会誌編集委員会(研究会事務局:
千代田区麹町4-5第七麹町ビル)

9月18日(土) 9:00～11:00

第9回幹事会(科学技術館サイエンスホール:
千代田区北の丸公園2-1)

一同 11:00～13:00

第8回理事会(科学技術館サイエンスホール)

9月18日(土) 13:30～14:30

第3回総会(科学技術館サイエンスホール)
・総会議長選出、・98年度事業報告/決算報告/
監査報告、規約改正/役員改選、・99年度事業
計画/予算案、・その他

一同 15:00～17:00

第3回研究発表会(科学技術館サイエンス
ホール)

・特別講演

・一般講演

一同 17:00～19:00

懇親会(科学技術館内グリーンハウス)

9月19日(日) 9:00～16:30

第3回研究発表会(つづき)(科学技術館サイ

エンスホール)

・一般講演

・ミニシンポジウム「霞ヶ浦における水辺植
生の衰退と復元」

9月20日(月) 8:00～15:00

霞ヶ浦現地見学(潮来～各地～JR土浦駅解散)

(2) 講演内容

講演は、順序などは未定ですが、発表予定の基本的な日程は以下の通りです。

I. 特別講演(9月18日予定)

「一生態学研究者から見た土木工学への期待」

小野勇一(九州大学名誉教授・日本生態学会
会長)

II. 一般講演(9月18日～19日午前予定)

1. 「多摩川永田地区河川敷における水環境(I)
河道変遷と流れ」

大野博之*(応用地質株)、対馬孝治(東京
農工大学大学院連合農学研究科)、小倉紀雄
(同)

2. 「多摩川永田地区河川敷における水環境(II)
地下水中の物質動態」

対馬孝治*(東京農工大学大学院連合農学研
究科資源・環境学専攻)、小倉紀雄(同)、
大野博之(応用地質株)、上田真吾(日本大
学生物資源科学部)

3. 「凍結コア法による河床間隙動物調査の試み～
木津川砂州における実験結果」

竹内康弘*(大阪府立大学総合科学部)、
中島拓男(滋賀県琵琶湖研究所)、
三田村緒佐武(滋賀県立大学環境科学部)、
谷田一三(大阪府立大学総合科学部)

4. 「近畿地方におけるダムの特性と水鳥群集の関
係～ダム管理との掛かり合い」

山岸 哲*(京都大学大学院理学研究科)、

森 貴久(同)、川西誠一(同)、

Navjot S. Sodhi(同)

Ⅲ. 一般講演(9月19日予定)

1. 「原石山跡地等における法面緑化の現状と今後の課題」

今本博臣* (水資源開発公団試験研究所水環境研究室)

2. 「礫間接触酸化水路の付着藻類による水質浄化効果の評価」

尾島勝(福山大学工学部建設環境工学科)、津田将行*(同)

3. 「積丹川における魚類生息環境の保全と創出」

坂下拓*(社)北海道栽培漁業振興社)、渡辺彰彦(同)、野口恭延(北海道小樽土木現業所余市出張所)、永田光博(北海道立水産孵化場)、柳井清治(北海道立林業試験場)、中尾勝哉(社)北海道栽培漁業振興公社)

4. 「カワヤツメ幼生生息場の創出の試み」

中尾勝哉*(社)北海道栽培漁業振興社)、井出康郎(北海道開発局開発土木研究所河川研究室)、見延昇(北海道開発局小樽開発建設部)

5. 「浦士別川における農業明渠の魚類生息環境の変遷」

小長谷博明*(社)北海道栽培漁業振興公社)、村上一夫(同)、奈良部繁(同)

6. 「真駒内川における微細砂堆積と付着藻類の現存量に関する研究」

山田浩之*(北海道大学大学院農学研究科森林管理保全学講座)、中村太士(同)

7. 「水田生態系における環境要因と生物群集の関係——田園の水環境はモザイクか？」

石澤伸彰*(応用地質(株))、江崎保男(姫工大・自然研)、三橋弘宗(兵庫県立人と自然博)、橋口大介(アジア航測(株))、岡野欣子(同)、森涼子(株)ニュージェック)、古川整治(株)水建設コンサルタント)、厨子和典(以下同)、板東礼子、佐藤由紀子

8. 「真駒内川における改修工事が底生魚類の生息場環境に及ぼす影響」

渡辺恵三*(株)北海道技術コンサルタント)、中村太士(北海道大学大学院農学研究科森林管理保全学講座)、新目竜一(前北海道開発局開発土木研究所)、渡辺正順(財)リバーフロント整備センター)、山田浩之(北海道大学大学院農学研究科森林管理保全学講座)

9. 「長良川河口堰下流の貧酸素水塊の形成と解消」

村上哲生*(名古屋市環境科学研究所)、

西條八束

10. 「長良川河口堰運用にともなう物理環境要素(塩分、水温、濁度)の分布の変化」

奥田節夫*(岡山理科大学理学部)

11. 「調節池における絶滅危惧植物タコノアシの保全」

米村惣太郎*(清水建設(株)技術研究所)、那須守(以下同)、高橋林、立花博令

12. 「ミティゲーションを目的としたカブトガニ産卵地の地形学的検討」

清野聡子*(東京大学大学院総合文化研究科広域システム科学科)、宇多高明(建設省土木研究所)

13. 「ダム完成後の下流域における植生モニタリング調査(特にケショウヤナギを対象として)」

小川直樹(北海道開発局帯広開発建設部札内川ダム管理所)、井出康郎(北海道開発局開発土木研究所)、入江潔(北海道開発コンサルタント(株))、石田義明(同)

14. 「沖縄北部地域における生態系保全対策—羽地ダムを例として—」

川崎秀明(沖縄総合事務局北部ダム事務所)、下田五郎*(財)ダム水源地環境整備センター)

Ⅳ. ミニシンポジウム『霞ヶ浦における水辺植生の衰退と復元』(9月19日午後予定)

1. 「霞ヶ浦における主要な環境問題とその対策」

富田和久*(建設省霞ヶ浦工事事務所)

2. 「発芽生態学からみた霞ヶ浦の水辺植物の衰退」

西廣淳*(建設省土木研究所緑化生態研究室)、荒木佐智子(筑波大学生物科学系)、鷺谷いづみ(同)

3. 「波浪とヨシ原の保全」

中村圭吾*(建設省土木研究所)

4. 「霞ヶ浦におけるアサザプロジェクトの展開(その2)」

飯島博*(霞ヶ浦・北浦をよくする市民連絡会議)

5. 「絶滅危惧植物オニバスとミズアオイの繁殖生態とビオトープにおける管理」

橋本裕美子*(筑波大学環境科学)、飯島博(同上)、鷺谷いづみ(筑波大学生物科学系)

6. 「潜在的な植生復元材料としての浚渫土」

鷺谷いづみ*、大村理恵子、池田佳子、村中孝司、荒木佐智子(以上筑波大学生物科学系)、路川宗夫(筑波大学研究協力部)

注)*印:講演者

(3) 霞ヶ浦現地見学

9月19日ミニシンポジウムの報告・説明・議論を

受けて、20日には霞ヶ浦の現地を見学します。皆様、
連続して御参加下さい。

——スケジュール——

- 9月19日(日) 17:00 サイエンスホール前出発
(チャーターバス、東京—潮来)
[潮来宿泊先:阿や免(あやめ)
旅館 茨城県潮来町108-24
TEL.0299-62-2127]
- 9月20日(月) 8:00 旅館前出発
(潮来—水郷トンボ公園—アサザプ
ロジェクト実施現場—土捨場—石岡
の休耕田のビオトープ(オニバス
池)—JR土浦駅解散(15:00頃)
(9/19夕食、9/20朝食及び昼食付きです)
(なお、9/20の現地見学では、建設省及び水資源
開発公団からマイクロバスが提供されます)

(4) 参加料

一般参加者及び講演者ともに下記参加料とします。

1)第3回研究発表会参加費

- ・正会員、賛助会員: 6,000円
- ・学生会員: 2,000円
- ・非会員: 8,000円
- ・学生非会員: 3,000円

2)懇親会参加費

- (会員・非会員同じ): 4,000円

3)霞ヶ浦現地見学参加費: 15,000円

(1泊2日3食、東京—潮来—現地見学交通
費含む)

注1) 9月18日総会のみ出席の正会員は無料。

注2) 当日配布する講演集費用含む。講演集のみ
希望者には、2,000円でお分けする。

注3) 振込された参加料は返却しませんのでお気
を付け下さい。

(5) 申込み期限等

参加申し込み期限:

1999年 8月31日(火) 消印有効

申込みに当たっては、

[第3回総会、第3回研究会、懇親会、霞ヶ
浦現地見学]

について、各々の参加、不参加及び会員番号、
氏名、所属、連絡先(〒、住所、TEL、FAX、
E-mail)を明記して、事務局まで、郵便・FAX・
E-mailでお送り下さい。

参加費用については、参加項目の合計金額を9
月10日(金)までに下記指定口座に振込下さい。

なお、会場が定員 400名と大きく、定員制限の
必要はないと考えられるので、申込み後、事務局
からの連絡はいたしません。当日会場受付にて
氏名・所属を申し出、確認後入場して下さい。

参加費用について、請求書等書類が必要な方は、
申込みに当たってその旨明記して下さい。

【申込み及び問い合わせ先】

応用生態工学研究会事務局

〒102-0083 東京都千代田区麹町4-5

第七麹町ビル226号室

TEL.03-5216-8401 FAX.03-5216-8520

E-mail: see@blue.ocn.ne.jp

【指定口座】

・郵便振替口座

(口座名称) 応用生態工学研究会

(口座番号) 00140-7-404275

・銀行口座

(クマノヨシミ)

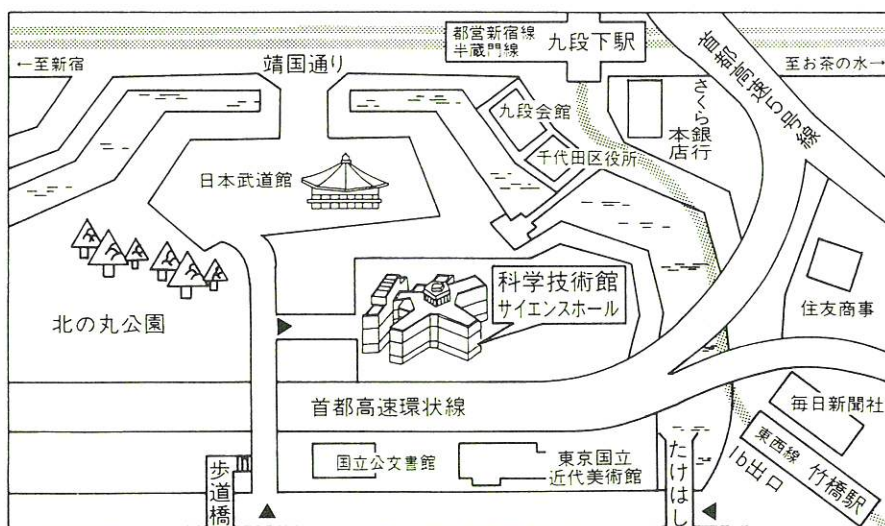
(口座名称) 応用生態工学研究会熊野可文

(銀行名) あさひ銀行麹町支店

(口座番号) <普通> 3686728

注) 指定口座に振り込む場合、参加する個人名
が分かるようにして下さい。

会場：科学技術館サイエンスホール案内図



(地下鉄東西線・竹橋下車1b出口 徒歩7分 北の丸公園内 日本武道館手前)

3. 福岡基礎講座開催案内

福岡における基礎講座について、このたび生態学の基礎講座を実施することが決まりましたので御案内いたします。

生態学の基礎講座については、昨年度は東京で7回の講座を開き、本年度は7月17日～19日に札幌で開催しました。両講座とも講座主任である鷺谷いづみ幹事のもと多くの参加者を得て、土木サイドが生態学を学び、生態サイドも新しい生態学の姿を学ぶということで大変好評でした。このたび、福岡の工学関係者が、是非この生態学基礎講座を福岡でも開催したいと、強い要望を寄せられたことから、今回の開催決定となった次第です。当初企画していた土木（河川水理・水質）の基礎講座については、改めて別の機会に開催したいと考えております。

福岡の基礎講座については、以下の概要が決まりましたが、講師及び講義内容等は改めて連絡いたします。受講希望者には、申込み受付を開始しますので、事務局まで御連絡（FAX、E-mail等）下さい。

- ・講座名 : 福岡基礎講座
『多様性と保全の生態学』
- ・開催月日 : 1999年11月26日(金)～27日(土)
- ・会場 : たばこ会館（福岡市博多区博多駅東1-18、TEL.092-431-4071）
- ・講師(予定)
 - ：鷺谷いづみ（筑波大学助教授、植物生態学・保全生態学）講座主任
 - 江崎保男（姫路工業大学助教授、動物生態学）
 - 竹門康弘（大阪府立大学助教授、生態学・陸水生物学）
 - （他折衝中）
- ・受講料 : 正会員・賛助会員 6,000円、
非会員 8,000円、学生 3,000円
- ・定員 : 120名（申込み先着順）

なお、福岡での講座開催にあたりましては、「福岡研究実行委員会」を設置して、具体的な活動を実施して行きたいと考えておりますので、実行委員としての参加希望者は事務局まで申込み下さい。

4. いろいろなニュース

新著紹介

・「流域一貫—森と川と人のつながりを求めて」、中村太士、築地書館、本体2,400円：本研究会の幹事でもある中村さんの単著。中村さんは、研究発表会や講座でも明解で鋭い論議や解説で知られているが、この図書にも彼の面目がよく表れていて主張は明解でよく判る。流域を統一的にとらえる必

要性は多くの人が理解しているが、それを実践している研究者は少ない。中村さんは、釧路湿原や北海道の河川などで、具体的に流域一貫の研究を展開している。それらの研究の紹介には教えられることが多い。米国オレゴンの森林河川管理やnew forestryの紹介も、筆者のオレゴン州立大学での研究実践に裏付けられたもので示唆に富んでいる。応用生態工学研究会は、生態学と工学との境界領域に新しい知と技術の創出を目指して発足した。中村さんの立場は、生態学や工学（砂防学）のいずれとも違ったもので、そもそもこの境界領域の中心に立脚していることが、この本から理解できる。生物多様性を主要な課題にする保全生物学あるいは保全生態学に対して（あるいは加えて）、景観生態学がこれからの河川流域管理に必要なとの議論もある程度は理解できる。もちろん、これらの2つの学問は対立する考え方ではない。河川の研究者、管理者だけでなく、河川や自然の保護に興味のある市民にも必読の書である。とくに、市民の関わりと責任についての中村さんの意見は傾聴に値する。白黒写真の印刷があまりよくないと、本文と写真の位置がちぐはぐなものが多いのが悔やまれる。〔谷田一三〕

・「貝のパラダイス—磯の貝たちの行動と生態」、岩崎敬二、東海大学出版会、本体2,800円：マイホーム、避暑地の別荘、サーフィン、家庭菜園、遊びの時間。いずれも私たちの憧れである。小さくて寡黙に見える磯の貝たちが、私たちの夢を実現しているとは、この本を読むまでは知らなかった。著者はクノハナガイに個体識別の印をつけて10日間以上の連続観察をすることで、貝の間の争いや順位制があることだけでなく、遊びとしか思われない行動をする優位個体の存在も示した。直接観察や野外での操作実験によって、磯貝の生態学がここまで進んでいることを、岩崎さん自身の研究成果だけでなく、世界の最新の成果も含めて示した好著である。貝の生活から人の生き様にもコメントがされ、その内容には彼の人柄がしのばれる。磯貝の研究は、1970年代から生態学のなかでも先進的なものであり続けたが、さらに研究が進んでいることがよく判る。この本を読むことで、磯観察の幅が広がること間違いない。沿岸開発や釣りを含む人為影響で磯の環境が危機に瀕していることも触れられているが、この部分については、もっと書き込んだ著者の次の本を待ちたい。ちなみに、家庭菜園はカサガイの仲間が好物のらん藻を栽培し、なわばりを作って他の貝の侵入を防ぐという。〔谷田一三〕

5. 事務局報告

札幌の基礎講座では、200名以上が受講するという、大変な盛り上がりになりました。毎回、各地の実行委員会の皆様には感謝にたえませんが、この札幌の実行委員会のメンバーの活動力には頭が下がります。講師の4先生も感謝することしきりでした。

さて、これから第3回総会・研究発表会へ向けて準備を急がねばなりません。福岡の実行委員募集をしましたが、この東京での実行委員の募集もします。是非事務局まで連絡下さい。

〔1999年8月6日現在会員数〕

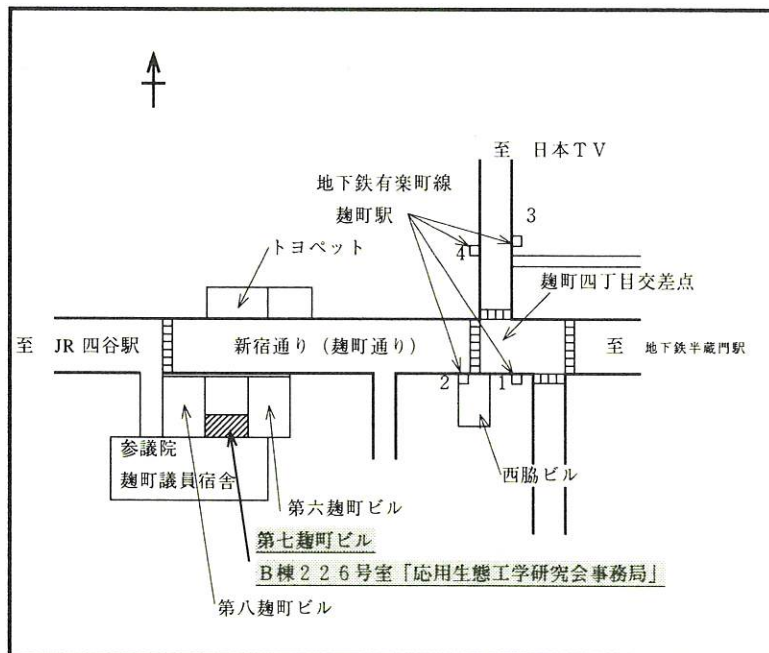
正（学生）会員 951名

賛助会員 59法人

(97年度以来年会費未納の方がおりますが、9月頃までに本人に確認しますので、納入に協力して下さい。)

〔研究会活動〕

1999. 7. 3 ・当研究会理事である山岸 哲京都大学教授が、我が国の鳥類学の発展と鳥類の保護に顕著な功績のあった人に贈られる山階芳麿賞を受賞され、その記念講演会が科学技術館サイエンスホールで開催された。
- 7.17 ・札幌基礎講座「多様性と保全の生態学」開催。220名受講。
- 7.29 ・霞ヶ浦現地見学準備で、潮来の宿泊先「あやめ旅館」、建設省霞ヶ浦工事事務所富田所長に挨拶。
- 7.31 ・第3回研究発表会の一般講演申込み及び奨励研究申込みの期限。一般講演は、24本、奨励研究は4本の申込みがありました。
8. 3 ・福岡基礎講座準備のため、楠田先生（九州大学教授）と研究室で打ち合わせ。
- 8.10 ・ニュースレターNo.8発行



応用生態工学研究会事務局

〒102-0083 東京都千代田区麹町4-5 第七麹町ビル（2F 226号室）

TEL. 03-5216-8401 FAX. 03-5216-8520

E-mail: see @ blue.ocn.ne.jp

〔地下鉄有楽町線麹町駅徒歩3分〕

〔地下鉄半蔵門線半蔵門駅徒歩7分〕

〔JR中央線四ツ谷駅徒歩10分〕